

III 双方向教育番組実現への課題と道程 ——まとめにかえて——

佐々木 正 實

双方向教育番組の放送が日常的に行われる時代を招来するために解決すべき課題は何か、そのためには、何をしなければならないかを整理し、まとめに代えたい。

1 ネットワークの整備と端末の開発普及——ハード面の課題

すでに、何度か触れてきたように、なめらかな動きの映像を伴った高度な双方向番組が実現するためには、インフラとして的高速大容量の通信網の整備が大前提である。

加えて高度な回線制御技術が必要である。放送では、一度に数千、数万の視聴者が、同時に放送局にアクセスしてくる。これをさばくには、高度の回線制御技術が要求される。今回の実験では、4つのサイトが参加したにすぎなかったが、それでも実際に制御するのは難しかったのである。仮に、技術的限界に挑んだとしても、たかだか、16サイトであったと聞く。これでは、「放送」とは呼べない。

さらに、実験では、通信システムと放送システムを結び付けるにあたって多くの困難に直面した。双方向システムと一体化した、使いやすい放送システムの開発が必要である。

また、マルチメディア型の家庭用テレビ端末の開発と普及も重要な課題である。各家電メーカーやパソコンメーカーでは、全力で開発に取り組んでおり、近い将来、各家庭に普及することになるだろう。

2 質の高い双方向番組を実現するために——コンテンツ面の課題

メディア教育の研究者には、双方向教育番組の効果についての研究を進め、その理論化を図ることが期待される。これは、メディア教育の体系の中に双方向教育番組を正しく位置づける作業と言えよう。

プロデューサーやディレクターなど、教育番組の制作者には、演出や番組構成の面での研究が要請される。教育番組は、「放送」であるかぎり、構造（構成）を大事にする。しかしながら視聴者が参加する双方向番組である以上、従来の番組にはない「弾力性」を持たせた演出を追求することは当然である。また、新しいスタジオセットの開発も不可欠である。それは、従来の教育番組のスタジオセットとは違い、パソコンとディスプレイがうまく組み込まれたセットである。この装置は、講師にとって使い勝手が良いだけでなく、視聴者からは見やすいものでなければならない。試作番組では、残念ながらそこまではゆかなかった。

出演講師側の課題もある。出演講師は、まず、双方向番組の意義について理解する必要がある。教室ですら、必ずしも双方向の講義が展開されていない日本の大学の現状を考えると重要な課題である。

日本人は欧米人に比べ、プレゼンテーションは苦手である。双方向番組の良さを最大限発揮するためには、講師のプレゼンテーション能力の向上は不可欠であろう。アットホームな雰囲気

気を作りだす話術、仮想教室を視聴者に実感させる話術、緊張感を醸しだす話術などの訓練は重要である。加えて、端末の操作についても慣れてもらわなければならない。

3 できることから始めよ——実験番組の必要性

放送局にとって、教育番組を双方向化することは、そう簡単ではない。双方向化は、生放送化を意味する。従来の発想では、日常的な生放送と言えば、報道・情報番組やスポーツ中継、それに一部の娯楽番組に限られていた。「教育番組は録画」という前提で動いてきたのである。それを生放送化するには、リソースや番組編成などの面で、解決すべき課題がたくさんあるに違いない。

この壁を突破するには、双方向番組を期待する世論のバックアップが不可欠である。そのためには、双方向番組の良さをアピールする必要がある。それには、実験番組をなるべく頻繁に放送するに越したことはない。

実験番組の「双方向のレベル」は、ふたつの意味で高度でなくとも良い。ひとつは、通信網や端末のレベルである。高速大容量の通信網が無くても可能なレベルで良い。家庭用の端末についても同じである。すでに指摘したように、テレゴンや、ITビジョンなど電話回線を利用した「音声のみの双方向」なら、現時点でも可能である。講師が、視聴者の理解度を把握したり、仮想教室を実感したりするには、十分ではないまでも、かなりの程度間に合う。つまり双方向番組の良さをアピールできる。

もうひとつは、参加する視聴者（学習者）の数である。我々は、希望する全部の学習者が、スタジオと双方向で結ばれるという前提で試作番組に取り組んだ。しかし、参加者の数には、あまりこだわらなくても良いのではないか。数人が参加するだけでも、双方向番組の良さは、かなりの程度発揮できるのではないか。

また、実験番組のメディアとしては、必ずしも実現のむづかしい「放送」にこだわることはないだろう。CATVなら比較的容易である。

実験番組は、双方向番組の理論化や演出技法の向上のためにも不可欠である。試作を終えた今、我々は、「ドラマ」ではなく、実際に大量の視聴者が参加する「本当の」双方向番組を試作する必要性を実感している。実験番組の制作とその評価を繰り返すことによるのみ、双方向番組はその演出技法にみがかがかけられ、理論化も強固になり、世論形成も進む。

こうした、言わば準備段階を経ることによって、高速大容量の通信網が整備され、家庭用のマルチメディア対応テレビ端末が普及した時代が到来した時、すみやかに高度な双方向教育番組が実現するのである。